

P C B 廃棄物処理事業評価検討会（第 1 回）議事要旨

1 . 日 時 : 平成 1 5 年 1 月 1 7 日 (金) 1 0 : 0 0 から 1 2 : 0 0 まで

2 . 場 所 : 経済産業省別館 8 階 8 2 1 会議室

3 . 出席委員 : 岡 敏弘、北野 大、酒井 伸一、崎田 裕子、佐藤 泉、
竹内 憲司、田辺 信介、永田 勝也 (敬称略)

4 . 議 事

- (1) 検討の進め方について
- (2) 事業評価の方法について
- (3) その他

5 . 議事概要

■ 議事進行について

- ・ 検討会の座長は、早稲田大学理工学部教授の永田委員が務めることとされた。

■ 今回の議事録について

- ・ 要すれば修正をした上で、公開することとされた。

■ 議題 (1) について

- ・ 資料 1 に基づき、検討会の趣旨、検討頂く事項について報告。
- ・ 資料 2 に基づき、会の運営方針が説明され、会は原則公開とすること、会議録もホームページ等により、公開することと説明。
- ・ 資料 3 に基づき、P C B 処理事業の現状についてビデオ等を用いて説明。
- ・ 資料 4 に基づき、検討会の全体スケジュールが示され、今年度内に 3 回開催し、その後中間的なとりまとめを行うことと説明。
- ・ 主な意見は、以下のとおり。
 - 外国における処理の状況はどうか。
 - P C B 処理の卒業基準である 0.5ppm の決定経緯について整理すること。
 - P C B 処理に伴うダイオキシンに関する基準等について適用関係を整理すること。

■ 議題 (2) について

- ・ 資料 5 に基づき、保管継続等の P C B の環境放リスクについて説明。
- ・ 資料 6 に基づき、費用便益の枠組みについて説明。
- ・ 主な意見は、以下のとおり。
 - 住民とのコミュニケーションをどういうふうに進めながら事業を進めるかということ
を事業評価の中にとりいれるべき

- 具体的な評価方法ということにとどまらず、もっと大きな事業評価の考え方とか進め方ということについて考えることが大事
- 代替手法とかC V Mとかこうした経済的な手法を使う前提として、リスク評価が必要
- P C B対策全体システムの費用便益分析もできる。どのくらい補助することで中小企業のものが円滑に回収処理できるかということも感度分析をするなり、シナリオを考えていくつかパターンを考えたらどうか
- 事業の必要性を説明する際に、費用対効果以外にももっと違う数字も必要ではないか。どんなにお金がかかってもやらなければならない場合にもできるだけコストを下げるためにどうしたらいいか。そういうものを提示するための費用の比較など、違う数字なり、違うアプローチがあってもいいのではないか
- 日本全体での政策、シナリオの書き方は色々あるかもしれないが、どのくらいの量を毎年処理するというような施設整備をしたときにどうなのか。そのときの整備費用やP C B当たりの処理費用などがどのくらいになるのか、どうしなければならないのかといったことも回答が要るのではないか
- より分かり易く説明できるようにした方が、色々な情報が出てきた方が、市民も関心を寄せる。立場によって市民の関心の持ちようが異なる。その色々なことに対応するようなわかりやすさが大切
- 今必要なのだというはっきりとした根拠と、将来のP C B処理に関する戦略的な総合的な評価を出すことが重要。政策の転換が必要な場合を考えて、できるだけいろいろな選択の余地を掲げた上で評価することが重要
- 日本全体の中で処理をどうやって進めていくかという話になってくると、基本的には処理を受け持つ地域の住民の方々からみれば、やってほしくないということもあるわけで、それは反対側から見ると保管という話になってくるけれども、両者の間のリスクの評価とそれに対する費用のありようというのは、法律以前の問題としてきちんと説明しておかねばならない
- どういう方法で処理するかという戦略の話として存在する。そこは次の段階で考えていく。最初の段階で処理をありきという形で、費用が処理方法によってかわるということだけで、問題全体に対しての納得は、直接市民の人たちと接したり地元の地方自治体の人と接していく中では解決がみいだせない。そういう意味で、もう少し原点に近いところで、これまでのやり方と制度をつくった意味合いも含めて説明していくような資料が必要ではないか
- C V M、代替法などの手法に関してリスク評価が前提という点については、両者は両輪で考えていかざるを得ないと思う。リスク評価について、数値化するために科学的な作業を積み重ねてきている。C V Mについては十分なリスク評価に基づく共通の認識が必要になるが、代替法に関しては、現実や経験をもとにしたはじき方が基本的にはできるのではないか。現実には起こっている事件をもとに一定の代替法による評価というのは可能ではないか。C V Mと代替法はそういう意味で次元を変えて考える必要があると考える。
- リスク評価についても、判断基準をどこでつかまえていくのか、排出の段階か、最後の人のところなのか、あるいは生態系というそういう影響まで見ていく必要もあるだ

ろうけれども、評価のなかに組み込まなければならない。この点は、切り分けながら考えていきたい

- 過去にこういった有害物質に国や社会や企業がお金を使ったりして対応してきたものがある。近くではダイオキシンの対応がある。そういう意味でP C Bだけの話をやるのではなく、類似の有害性のあるものをどうやって削減してきたか、そういう視点で、これまた見ることもあるのだろう。そのときに排出の段階で見て良くやり方、影響までもっていく、いくつかの段階があるのではないか
- アイデアとして提案すると、保管と暴露させないようにする費用と処理の費用の差をとり、処理によってリスクがどれだけ減るかを計算し、例えばガン1件減らすのにどれくらい費用がかかるということを計算する。そうすれば、ガン1件減らすのにダイオキシン対策ではどれくらいの費用をかけているかということと比較することができる。それと比較して効率的であるということは説得力がある
- リスク評価のところで人体影響のみを考えているけれども、自然環境への影響ということも考慮しておくことが必要ではないか
- P C Bを分解するということだから、自然環境も含めてどういう効果があらわれたのか、効果の検証をしないといけない。その手続き論、評価方法といったことも考えておかないといけないのではないか
- 余り既存の制度とかやり方とかとられず、P C Bの話を中心としながら、こういう類の問題に対してどういう考え方をこれからとっていけばいいのかという、重要な議論をしていただき、制度上どうだというのは次の段階で見ていくのがいいのかなというふうに考える。当面準備するものはやり、議論のほうは広げて考えていきたい
- コミュニケーションにもっていくために数字をわかりやすく出し、議論を巻き起こしていくことが大事ではないか
- 費用便益分析の説明の中では、外部コストの算出が極めて容易であるような印象を与えている。外部コストの不確実性、検証性をあわせて伝えていく必要がある。
- 無理やりに一つの方法で一つの答えということではないということも含め、それからどこのレベルでどう切り分けたら理解の促進に役立つのかという点も考えながら進めていくべき

■その他

- ・次回開催は、2月18日を予定

< 配布資料 >

資料1	P C B廃棄物処理事業評価検討会の開催について
資料2	P C B廃棄物処理事業評価検討会の運営方針について
資料3	P C B廃棄物の全国的な処理体制の構築について
資料4	P C B廃棄物処理事業評価検討会スケジュール
資料5	保管継続等のリスクについて
資料6	費用便益分析の枠組みについて
参考資料1	P C B特別措置法に基づくP C B廃棄物の保管等の届出の全国集計

結果について

参考資料 2 ポリ塩化ビフェニル廃棄物（高圧トランス・高圧コンデンサ等）処理施設に係る技術的条件及び環境・安全対策について